性格は皆通して才人の資あり。故にその觚を操るや。直に心血を攄べて文章をなすにあらで、雕心鏤骨に憂身を窶す傾あり。身世遭遇を回想して、俯仰咏嘆するにあらで、博を衒ひ異を立てゝ、翰墨を弄する傾あり。概して之を評せむか、康熙文學の多趣多樣に反對して、乾隆文學は稍々單調にして、千篇一律の謗あり。前者に於ての清新は、後者に於てはやゝ爛熟に陷れり、蒼勁は綺靡に變し、雅麗は纖巧と化したるか如し。遞莫、兩期とりゞの長所あれば、未た二三の點を捉へて、俄に甲を揚げ乙を貶すべきにあらず、共に清朝文學通有の特色と、流弊とを備ふる勿論なり。

（右清朝文學史總論中の一節）

逝ける北歐の巨人

（BJÖRNSTJERNE, BJORNSON.）

水郷

（一）

今年四月二十六日の夜、諸威の首府クリスチヤニアの外務省では、議會の關係者を招待して、大晩餐會か開かれた。國王も臨席された。各大臣も出席した。花のような千百の燈光は、嘻々として響く談笑の聲を照らし、泡立つ歡樂の盃を照して、更くるに從つて益々濃やかな影を落す。丁度雪が消にて待ち憬れた春が來た諸威國民の喜びを、此一堂に集めたかと思はれた。

折しも午前零時三十分、二通の電報は外相の手に渡された。外相は密かに開いて、やがてそつと王に囁く。

國王は其儘靜かに起つて歸られる、次で又來客一同に話すと一同もつゝましやかな沈默の裡に靜肅に散會した、やがてクリスチャニアに於ける、此夜の有ゆる公會は皆同樣に散會した、之遠く巴里から、諸威一代の文豪ビョルンソンの訃音が達したからである。

斯くて次の日には、クリスチャニアは無論コッペンハーゲンでも、ストクホルムでも、半竿の弔旗の翻らない所はない、スカンディナアビア半島は云ふ迄もなく、丁抹から北獨逸迄、新聞紙は皆黑枠を入れた。國王に對し、政府に對し、諸外國から弔慰の電報が續々來た。政府は軍艦を送つて又靈柩を迎へさせた。

斯くも世界に響いた一代の巨人ビョルンソンは如何なる人で、如何なる事業をしたか、自分は今ザッと其小傳を書いて見よう。

諸威の片田舍、エステルダーレンの谷々に近く、ヴイクネと呼ばるゝ町がある。高い山々に閉されて冬の來るのが殊に早い。樺の梢が紅葉したかと思ふと、もう雪が來る。野山は何時しか傷しい影に包まれて、家畜も野兎も、自然の威力の烈しさに身慄ひする。人々は暖い南方の旅と聞くと、我知らず心を動かさずには居られない。

一八三二年十二月八日、我ビョルンスチエルネ、ビョルンソンは斯る場所に呱々の聲を擧げた。

彼の父、ペーテル、ビョルンソンは此邊一帶の敎區の牧師として、其前年此地に來た人で。彼は其長子であつた。六歲の時、彼は又父に伴はれて、ロムスダル州のヲッセイと云ふ村に移つた。此所は諸威第一の好風景と云はれる所で、丘や谷々の眺めは、彼が幼い胸にも强い感動を與へた。或夏の夕、獨り、牧師館の庭に立つて、遙に雪を頂く連山の姿や、血のような落日に染められた脚下の岩を眺めながら、迫り來る黃昏の

影を仰いだ時は、我知らず泣き崩折れずには居られなかつたと、彼自身も書いて居る。

七歳の時からモルテの小學校に送られた。然し彼は教科書よりも、むしろ、周圍の農民生活や、北歐古代の神話傳說から遙に多くの教化を受けた。

其後十四五歳の時、彼は『新しき諸威の獨立』(當時諸威は尙瑞典の治下に在つた)なる聲に感動されて小さな回覽雜誌「自由」を作つた事もあつた。又偶然、諸威最初の國民詩人ゼルゲランドの詩「英國の水夫」を讀んで、詩人たらんと志したのも此頃であつた。一八四九年十七歳の時、クリスチャニアの高等學校に入つた。此處で彼は、田園詩人ヴインエ、小說家リーエ、やイブセンと親交を結んだ。彼とイブセンとは性格が全々反對であるにも係はらず、互に勵まし助け合つて、終生其友情を保つた。やがて戲曲 "Vallborg" を書いて、メトロポリタン劇場に其上場を申込んだ。幸にも受諾されたが、後其餘りに幼稚なのを悟つて彼自ら撤回した。クリスチャニア大學に入る前年一八五一年には、イブセン以下之等青年氣鋭の文士と共に、文壇に新旗幟を樹てんが爲め、週刊文藝雜誌「アンズリムナー」を發刊した。然し不幸にも九ケ月許で倒れた。英國の批評家ゴッス氏は之を以て彼のラッファエロ前派の人々が新文藝を叫んで出した最初の雜誌「ジャーム」と同じ不幸な運命に陷つた物と評して居る。當時彼は教育と政治の兩方面に其筆を揮つた。「諸威人の諸威」、之が當時のビョルンソンの福音であつた。

斯くて彼は首府に在つて、長く文人生活を續けようと決心した。此時代に於ける彼の境遇は一個苦悶の歷史であつた。單に生活の爲め許りでなく、人生上の問題や、又は自己の天分を如何に發輝す可きかと云ふ風な苦悶が、烈しく心を苦しめた。

二十四歳の時、某新聞の通信記者として、瑞典アプサラに催された學生祭に出席した。其處で彼は、友人の熱心なすゝめに從つて、愈々終生詩人として立つ決心をした。此處に於てか直ぐ二週間の裡に一幕物「戰のひま」を書いた、やがて此多感の人は、一卷の試作を抱いて遠く丁抹のコッペンハーゲンに向つた。此一篇で自己が作家としての前途がきまる、と思つた時。若き旅人の胸は無限の感慨に打たれたろう。然し不幸にして此戲曲は遂にコッペンハーゲベンでは何處の劇場でも用ゐられなかつた、が次年(一八五七年)十月にクリスチャニアで上場せられ、可成な成功を得た、次で其年のクリスマスには單行本として出版された。

其前年から彼は諾威の或繪入週刊新聞に筆を取つて、單篇物や續き物を公にした。其を同年の夏迄續けて、やがて女主人公の名に依つて、「ジンチェヴェ、ゾルバッケン」と題してやはり同年秋發刊した、之彼が小說の處女作であつた。

山村に於ける眞摯な農民生活を描いた此作が一度世に出るや、其中に寫された諾威國民本來の感情が強く社會の人心を打つて、端なくも此處に國民文學喚起の大運動が起つた。イブセンも之に和して自國の文學を全々丁抹の支配から奪はんと努力した。其結果がヘルグランドの海豪となつた。此後に於けるビョルンソンの史劇と同じく、北歐中古の傳說の中に自國民の眞の叫を聞かんと努めた物である。

イブセンがバーゲンの一劇場の支配人を辭してクリスチャニアに歸つた翌々年、一八五九年には同志の者と諾威協會を創立して、飽く迄諾威文學の獨立を實現せんとした、此處に於てビョルンソンは推されて其會長となり、イブセンは副會長となつて、對丁抹派の文學的爭鬪は激烈に開始された。やがてイブセンは或る失敗の爲め首府を去るの止むなきに到るし、ビョルンソンもバーゲンの一劇場の招聘に應じて、クリスチャ

ニアを去つた、斯くて二人は當時尙勢力を占めて居た、多數丁抹派の新聞紙の爲めに攻擊嘲罵の標的とされたビヨルンソンはバーゲンに在る事一年、同地で書いた劇評や單篇物をまとめ、「くさ〴〵の記」と題して公にすると共に、一八六〇年の五月一家を擧げてコツペンハーゲンに移つた。

同年の暮には、彼が幼少な頃から遠く憬れて居た「暖き南方の旅」伊太利巡遊の途に就いた。六二年の五月迄、旅の大部分を羅馬で送つた。イブセンが本國を嫌惡して羅馬に入つた二年前、ビヨルンソンは又北歸の旅に就いた、本國に納れられなかつた此二大巨人が、「ローレル」の花薰る野をさまようて七丘榮華の跡に立つた時は如何なる感慨に打たれたろうか。輝く宮殿寺院の裏に入つて殘された古き藝術の華を如何に味つたろうか。自分は斯く考へるさへ心を躍らさずには居られない。

悲劇「Kong Sverre」は羅馬滯在中に出來た。彼が傳說劇中の雄篇「Sigurd Slembe」は歸途ニイロルで書き上げられた物である。

一八六三年再諾威に歸つた後の十年は。全く沈默の裡に過された。然し此間に於ける彼の現れざる努力は非常な物であつた。南歐を見て來た新しき彼は、更に新しき時代の哲學、科學、文學を、力を盡して味つた、彼が斯く沈默のまゝで努めて居た間に、イブセンが歐州各地を放浪しして居た間に、何時とはなしに彼は諾威唯一の文學的巨人となつた。

やがて七一年に到つて彼は再蹶起した。全く著作的活動を中止し、「諾威の救護」「社會の改造」を叫んで全國を廻つた。遂に瑞典から歐州を經て、遠く米國迄も渡つた。本國に於ては尙論難を免れなかつた彼も、歐州を經、更に米國に入るに及んで非常な歡迎を受けた。「諾威の救護者」と聞いて、もう物好きな米國人は、

ウイ〳〵言つて彼の周圍に集つた。

ブランデスの言に依ると、彼はスカンディナビア第一の雄辯家であつた。長大な手脚、頑强な躰軀、壯重にして威嚴ある顏容に渾身の熱血を傾けて、「諸威の救護」「全社會の革新」を絶叫する時は、何人も動されずには居られなかつた。

斯くて再度本國に歸つた彼は、一八七四年に、ゴウスダル州リシハンメルの町に、アウレスタッドと呼ばるゝ莊園を買つた。ヴエランダとバルコニーを備へた大農家のような建築であつた。リチャード、ル、ギャリエン氏が同莊園を訪ふた記事に次のような事が記してある。

「ビヨルンソン氏の家は老松に包まれた谷間にある、米國風なゼラング附の家である。吾々が不格構な田舍馬車で着いた時、ビヨルンソンは兩手をさしのべながら待ち侘びて立つて居た。廣やかな、丈夫そうな、厳はあるが穩かな其顏を吾々の方へ向けて、

"Welcome to Aulestad"

と叫んだ。肩に白い手拭を乘せて居たが、

「私は上の谷で水浴をして來ますから……暫時どうぞ。……今日はさぞ愉快でしよう」と云ふ。

其處で吾々は其後について松の木間を上へ上つた。すると、十二三呎の瀧が岩間を落ちる處へ出た。丁度サタンの神のように、岩と松との中に、肩から白い水を浴びながら立つた、此大偉人の姿を、私は永く忘るる事は出來ない。

斯くて吾々は又々屋敷の方へ降りて來て美しい夫人と、美しい令孃バーグリオットと、當時クリスチャニ

ア帝室劇場の支配人であつた令息さに過つた。

古代ガガ風な衣を來た夫人と、ビヨルソン氏は、キングとクヰーンと云つた風に、食卓の首席に着いた。而して吾々四人の客の爲めにスケールの盃を擧げた。

後程ビヨルンソンは私を書齋に伴つた。二人がイブセン（イブセンの令息とバーグリオツド嬢とは後に結婚した）に就て話した時、ビヨルンソンは斯う云つた。

"Ibsen is not a man —— only a pen."」

斯くの如く我巨人は終の三十年を、多く此莊園に暮らした。胸にしみ込む渓流の響を聞きつゝ、晴やかな松林を靜かに辿つた時、彼はどんな感慨に打たれたろか。

立つて周圍を見まはすと、諾威はやはり舊態のまゝである、上流社會の人々は自國古來の氣風を忘れ、尙他國の文物にひたすら渴仰の情を繫ぎ、寂れゆく村々の農民は、依然として傷しき迄に壓伏せられて居る。「極光」が凄じく雪に輝く宵などは、自作の詩「然なり、吾等は此國を愛す」を口誦さんで、獨涙のこぼるゝを禁じ得なかつた。

斯くて一方には近代的な作品を出して、諾威のコンベンションに大痛棒を喰すと共に、他方には又々社會問題や對瑞典の國際的運動に迄其雄辯を振つた。斯くて「破産」を出し「神の道に」を出すと共に遂に、諾威瑞典の國旗を分離せしめた、斯くて、「諾威人の諾威」「嚴格な意味に於ける民主政治」を主張しつゞけた彼は、「國家は個人の呪咀なり」と叫んだイブセンと、全し主義上の敵となつた。

此頃の彼に對する國民の渴仰崇拜は非常なものでであつた。「諾威の國族」、「吾等の先導者」と云ふ思慕敬愛

の聲は、曖かく彼の身邊に響いて、謹直な其一擧一動は、絶にず強く國民の心を刺戟した。

此麼話かある。近年の夏、機動演習を了へた一軍隊は、端なくも其莊園アウレスタッドの下を過ぎた。すると各聯隊は皆大元帥に對すると同し捧銃の禮をしては、分列式を以て、彼の前を通つた。やがて凡てが終つた時、兵士が衷心敬慕の情は晴やかな萬歲の叫びとなつて、ビヨルンソンが作つた「諾威國歌」は高く一齊に唄はれた、此時帽を手にしながらゼランダの上に立つた偉大躰軀の人は、蓋し微笑の浮ぶを禁し得なかつたろう。

一九〇二年、彼が七十の高齡に達した時、其本國は勿論、歐州各國の各地でも、偉人の長壽に對する盛大な祝賀會が開かれた。深く深く其國の土を愛し、傷附けられた民に心からの涙を注いた、人は今や、救はれた國、救はれた民に心からの喜ひを寄せられる身となつた。

去年十一月、彼は例年の如く避寒の爲めに、又巴里へ來た。老衰と、神經痛の爲めに、其健康は頗る優れなかつた。殊に左半身不隨が出てからは、死は既に早く豫期せられた。今は名殘の作となつた「わかき葡萄が花咲かば」が尙巴里の劇場で盛大に演せらあつゝあつた頃——雪か消えた諾威では「然なり、我等は此國を愛す」の歌が霞の底に響く頃——今年四月二十六日の夕、巴里の客舍ワグラムの一室で此一代の巨人は、靜かに永遠の眠に就いた。あゝ「今や我は逝かん」と云ふ一語が、褪せ行く唇を洩れた時、「諾威の愛護者」「諾威文學の創始者」「諾威の國旗」「北歐の巨人」「世界の文豪」は、永く吾々の世界を去つた。

ビヨルンソンの靈柩をのせた諾威の戰艦ルルゲが、冷たき北洋の波を碎いて、クリスチャニアの港に錨を卸したのは、五月一日午後三時五十分であつた。國王に對すると同じ二十一發の弔砲が、晴れ渡つた空に傷

しく轟くと、港をかこむ幾萬の弔旗は、皆一齊に伏せられた。やがて、國旗に包まれた靈柩が、棧橋に着いた時、國王は自ら立つて未亡人と令息に哀悼の辭をのべ、無數の民衆は一度に其帽を悅した。

「あゝ我等の旗を樹て行く人は倒れた」「今や我々は我前途を失つた」と云ふ哀痛の叫は、傷しく全諾威に響き渡つた。人々は國立劇場前の立像を、なつかしげに仰いでは心に幾度が其人の偉業の跡をくりかへした。百八の花環の上に安置された靈柩が、國旗と共に土に沈んで、淋しき「哀歌」の聲の裡に、旗が墓穴の上に伏せられたのは、三日午後四時であつた。

斯くてビヨルンスチエルネ、ビヨルンソンの名は永く北歐の土に刻まれた。斯くてスカンヂナビア半島の存する限り、「極光」の輝の滅びざる限り、世界の歷史のつゞく限り彼の名は長へに人類の胸に殘る。

(二)

第一期の作品と其批評。

ビヨルンソンの藝術的作品は、明かに前後二期に分れて居る。卽壯年時代と、成熟時代とである。前者は主に、ローマンチツクで、ポエチツクであるが、後者はリアリステイツクで、デイダクテイツクである。

一八五七年、彼が二十五歲の時、有名な「ジンネエヴエ、ゾルバツケン」が公にされた、「アルネ」と共に第一期に於ける代表的傑作と云はれて居る。「アルネ」は那威人が、遠く南國の暖さに憧るゝ、センチメンタルな、優しい傷ましい情性を描いた物で、「ジンネエヴエ、ゾルバツケン」は、雪園の落寞たる山村生活を背景に、熱情的な、片意地な青年農夫の性格を主人公ドルビユルンに依つて代表させた物である。

「ジンネエヴエ、ソルバゲン」は「アルチ」と同じく、農民生活の裡に養はれ育つた清き繼物語である。其中には哲學的思索とか、心理的探究とか云ふ物は求められぬ。況んや近代的社會問題などは影もない、或批評家等は、之を一種の散文詩――牧謠的抒情詩と迄云つて居る。

然し同じ山中の農民生活を描くにも、ツルゲニエフのような見方をする人もあるが、彼は全く之等と趣きを異にして居る。自分を作中の事件や人物の中に置いて靜かに其成行くがまゝを、眺るゝ云つた風である。ツルゲニエフを讀む時と同じように、讀者は隨所に、作者のハーモルな人格を認める事は出來るが、作者は筋の成行に對して何等干渉がましい事をしなかつた。むしろ其成行から全々自己を離して居る。何處にも故意らしい處がない、如何にも自然な感じがする。

人々は、短かい夏を惜んでは、束の間を咲く野山の花に、せめてもの歡樂を探る、其傷しい色が全体に染み出て居る。夏を送ると直ぐ冬支度に入る、忙しい山村の生活が眼のあたり見るようだ。一体ロークカル、カラットの描寫などは、餘りに尖端許りを強く寫そうと努むる結果、稍もすると誇張に失したり、技巧に走せたりする怖があるが、ビヨルンソンのは如何にも手際よく行つて居る。吉江孤雁氏も此に就て「作全體の調子に、全體の色彩に、自ら其色を帶んで居る」と評した。

南を涯る大山脈は高く天に聳ゆて、南方の暖さを飽く迄遮らんと努むるように見ゆる。山頂の雪は傷しく日に輝いて、吹き嵐す風は、野に丘に哀れなる人の子の肌を刺す。寒霧の閉ざす溪間々々、耕地を包む樺の防風林、毛皮を干す農家の窓……秋の中途に早雪を見て、やがて長い冬が續く。時としては、遠い北方の空に、「極光」が物憂く閃く事もある。

那威の自然は實に寂しく、傷しく、物悲しい。

丘の牧場に羊の鈴は響くけれど……山の湖に舟漕ぐ乙女の唄聲は聞ゆるけれど、吹雪の荒ぶ夕方等は、野も山も怖れ戰いて、無邪氣な小兒すら、自分に犯した罪でもあるかの如く、吾知らず泣き出して家に逃げ込まずには居られない。然し此麼な裡にも恋戀はある。殊に寺院は農民生活の中心である。

ビョルンソンが、養はれ、味ひ、知り、而して強く描き出した自然は之であつた。

「ジンネエヴエ、ソルバッケン」を包む空氣と、其文躰の清麗な點に就て、エール大學の、ヘルプス教授は下の如く云つた。

「此作全体がむしろ一種の牧歌と云ふ風に如何にも澄み切つた晴やかな感じがする。山の湖のように、ピュアーで、且爽かである。其裡には讀者のスタンダードを充分滿足させる、審美的統一以外に、何とも定め難い清秀な或物がある。想像の働き――作全体を包む詩美の覆ひが、此書を閉ぢる時、クリヤーな冬の落日に對する如き感を起させる。」

此若き作家は、此最初の成功に續いて、三個の小說――むしろ牧謠的抒情詩――を公にした、即 "Arne" (1859), "A Happy boy" (1860), "Fisher Waiden" (1868) 之である、中就「アルネ」は彼が傑作の一と言はれて居る。

ヘルプス教授は又云ふ。

「之等の諸作は皆「ジンネエヴエ、ソルバッケン」中に示したと同一の特性を見せて居る。

此等の藝術的作品に在つては、ビョルンソンは全々インプレッショニスドである。彼は物質的、精神的の

兩面に於て、其見たまゝを忠實に再現させた。地方的の景色や習慣や乃至は農民の性格などを描寫した此書圖が、充分精確な事を。自分は固く信ずる、吾々は之に依つて眼のあたり那威を見る。松林の香も嗅ぐ事が出來る。刺すような、鋭い大氣や暗綠な針葉樹の杜や……之等の物を吾々は、謂所 'Widnight sun" の國に身自ら在るかの如く、明瞭に感じ得る。農民の質朴な親切氣、村々の結婚葬送の儀式、羊が遊ぶ山牧の優しい淋しみや、又は如何にも鄙びた、服從的ではあるが然も深い伸びやかな信仰の念などが……讀者をして神の脚にまつわる黃金の鎖で、全社會が結ばれて居るかと思はせる。

ビヨルンソンは言ふ「那威の農民生活では寺院はフオアーグラウンドの位置に在る」と。之等の諸作にも在る通り、實際彼等は何事によらず「神」の周圍に集るから、全く會堂の尖塔は、全生活の心中である。此麼風に綺麗な叙事や叙景がもつれ合つて、氣高い音樂のように胸に響く。吾々の眼は何時かなつかしい涙に滿された。」

クリスチヤニア座の支配人となつた彼は、少からず劇作家としての經驗を得た、然し第一期に於ける彼の劇的才能は尙充分の發展を示さなかつた。此時に於ける彼の劇は、劇と云ふよりも、むしろ詩であつた。讀物としての劇であつた。

唯史劇 "Mary start in scotland" (1864)は舞臺上に於て見事な成功を納めた。動作の烈しい、感情の强い、メロドラマ風の作である。其二幕目、三幕目の結末の處などは、ドラマチストとしての作者の才能が好く現れてると云はれて居る。臺舞全体の空氣は如何にも烈しく、事件が一歩一歩緊張して、觀者を强く刺戟し、昂奮させる。唯惜しむらくは、此劇は結末が甚弱い、嚴格に云へば終がないと云ふ可きである。

手採の批評家ブランデス氏は之に就て、次の如く云つた。「思ふに此題材を取扱ふ上に得たる大なる成功はスコットランドの土地に居て、尙諾威の空氣に圍繞されてゐるのを意識して居た事である。――マリアステユアルトの性格描寫は左迄成功して居ない、彼女の特性は餘に朦朧として居る。一体マリアは、女の絶對的强性と、絶對的弱性との正反對な兩面を備へて、中に神秘的性質を現してゐる人物で、其運命は或定度迄彼女自身の性格に依つて支配される。其性格描寫に於て、マリアは北歐の理想主義と、作者自身の謹直な人格の爲めに、餘りに肉感的要素を失つた。又ヒロインとしては餘に受動的である、元よりビヨルンソンの描いたマリアステユアルトは全々純潔な人物であるとは云はぬ。無論歴史上のマリアは、英國の詩人スインバーが書いたような肉慾と、殘虐と冷酷との化身ではなかつた。然しスインバーの方がビヨルンソンのよりは、歴史上眞に近いと思はれる。ビヨルンソンのマリアには何等の魔力なく、文藝復興期を想起せしむる所が殆ない」

當時のビヨルンソンは、ケヤケゴールの感化をうけた。斯くて直接人物の性格を描かずして、側面から心理的に現さうとしたのが此作である。作中の人物は一種の心理學者である。彼等は相互に其性格を研究し、談議し、經驗した。

斯之等牧話風な諸作と史劇を公にした後數年の間、ビヨルンソンは暫時沈默を守つた。然し其間の彼が勉强は非常な物であつた。此大努力あつて始めて後の大發展が生じたのである。

大自然に對する、若々しい思慕憬れの情は、漸次に人事の紛糾を交へて、復雜になつた。國際問題にも關係した。旅行もした。思想も何時か圓熟して來た、ダルヴン、スペンサー、ミルを讀んだ彼は、遂に新教信

者となつた。更に四十歳を越すに及んで、彼の思想、彼の作品は驚く可き變化を來した。

（三）

第三期に於ける作品と其批評

一八七五年、彼の戯曲、「破産」は、イブセンの「社會の柱」に續いて發表された。兩者ともよく似た思想で、隨所にいたく喝采された。次で戯曲「挑戰」を出した。處が其ヒロインが「婦人に對する道德も男子の其と同一でなければならぬ」と喝破した爲め此度は保守派の人々から手酷しく誹難された。

其後、セアターマガジン紙上で、バーナード、ショウ氏は此に就て言つた。「斯くて偽飾的な憶病な連中は、罵倒され、皮肉に愚弄された。此一擊は嵐のような議論を惹起したが、遂に「新しい眞理が生れた」と云ふ印象を、強く人心に彫んで、保守派の敗に歸した。「男子が婦人に負ふ道德上の責任は唯其未來に對してのみ。然も婦人は、過去未來の兩者とも男子に對して責任を有すとは、實に舊思想の宣言である。然るに「新しき眞理」は――ゼ、ヒ、ジンジンに依つて「挑戰」中に宣言された「新しい眞理」は次の如く告げる。男女は其過去及未來に對して、相互に責任を有す。然も此は彼等自身の幸福の爲に非ず。唯來る可き時代の爲めのみ」

「斯くて彼はイブセンと相並んで、近代的社會問題、兩性問題に指を染めた。彼の革命的戯曲「國王の前に」は、より以上な破壞的思想があると云ふ。次に出た『Beyond Human Power』には二十世紀の大問題たる勞働問題を入れた即第一期の作品に比しては、極めて、現實的に痛切になつて來た。」

此頃でも、ビョルンソンは尙詩人としての風格を失はなかつた。歌謠や抒情詩には依然として眞詩人の
がある。其隨所に溢るゝ愛國思慕の情は、血と涙との跡を見せて、人をして襟を正さしめると云はれて居る。
し漸次歳を取ると共に、其が人生上の眞面目な問題に對する、嚴肅な批判に變じて來た。斯くて一度眼醒
た彼は、社會に對して警鐘を打つた。

"Frags are flying in Town and Harbours" (1884)には經濟問題——重に遺産相續に就ての批判がある。且つ
メスメリズムやヒプノチシズムの輕視す可からざるを說く所などは、全々病理學的である。此處にも作者は
「男女兩性に對する道德の同一標準」なる例の福音を說いた。

"I God's Way" (1889) では更に烈しく舊道德、舊思想を破壞し、蹂躙した。作者は言ふ、信仰に依つて、人
生の意義は生ぜぬ。唯重す可きは個人の行爲である。然も、コンヴェンションや法律に全々無關係な——人間
衷心の慾求から生じた行爲に其全價値は存する。卽、個人の覺醒に依つて生ずる個人の權威、個人の尊嚴個
人の自由——此等の物に依つて始めて新しき意義が生まれる。

斯くて法律上全々姦婦である可き婦人も。ビョルンソンの倫理に從へば、純潔な處女になる。肉の節操に
對する心の節操と云ふ彼の倫理は"Mary" (1906) の中に、一層極端に示された。

ペルブス教授は又言ふ。

「此一編は、鋭い簡結な文章で書かれた、處心のパートと解剖である。然も有力な、興味ある解剖である。
モーパッサンの小說 Notre Coeur から確かに眞似たと云ふ風に人妻メリーは長らく熟慮した後に、誘はるゝ
ともなく進んで戀人に其身を寄せた。

斯る事になる、少しの原因もないので、婚約者の男は實に驚いた。然し事實女は、自らの自由意志で戀人に其身をよせたのである。

斯る行爲に對するメリーの說――卽ビョルンソンの說――に依ると、婦人は婦人自身の身体に對しては、最高の所有者である。自分が好きな事は何をしても構はぬ。彼女が自ら戀人に走つたのは、自己の自由の天與である。其處に何等の不德義もない。彼女は充分熱慮して、神の助に依つて其を行つた。だが夢々男性の要求に對して、脆くも服從した譯ではない。

然るに翌日メリーは、期待して居た尊敬と崇拜の代りに、昨日迄憶病だつた戀人が、女を物にしたと云ふ点から、急に亭主顏を仕出したので、女は悲慘な失望に墮ちた。此麼亭主と一所では、到底、絕對的な獨立生活は出來さうもないと心配しだした。――無論婦人の束縛なき自由が、ビョルンソンの福音である。其處でメリーは、殆ど人の母になり懸て居るに係らず、未だ見ぬ兒の父に對して、愼重に其婚約を破棄した。

先の事もあるので、男も我慢せざるを得なかつた。然し之は、先の行爲よりも、遙に男を苦めた、やがてメリーは最后の失望から、發作的に自殺しようとした時、星を慕ふ蛾のように、憧れ寄つた男の手に救はれた。其男は――メリーの過去の行爲は何等現在に關係せぬ。彼女は尙世の中で最ノーブルな、最純潔な淑女であつて、自分の胸に取つては貞節な女王であると、女に告げた。

斯くて事件の必然的な發展よりも、むしろ幸運の廻り合せから、メリーと其第二の崇拜者は我を忘れて歡樂に醉うた。斯くて此書は目出度く終りを告げる」

ビョルンソンの作品は、明かに前後二期に分れてる。其間を――丁度港と港の間を綴る島々のように、英雄

的史劇と國民的抒情詩とが其中をつなぐ。

綺麗な花の如き物として文藝を觀る人々には、第一期の作物の方がより多くの興味を與へるかも知れぬ。質朴な、清鮮な、人生の底を描寫した点に於て、到底其比を見ない。

ウェルプス教授は云ふ。

「最初の四個の小說と、最后の三個と比較すると――ジンネエヴェ、ゾルバッケンを讀んで更に、"In God's Way" を開けると何人にも直ぐ氣が附くが――實に著しい變化がある。丁度山の頂から病室へ來たように、空氣が俄に陰鬱に變る。后期の小說の中の、醫學上のグダ〳〵した說明などは、殆胸を惡くさせる。然し其が不合理と云ふ譯ではない。

然し之は唯或一点に對する批評に過ぎぬ。倫敦士曜評論と、シカゴ、ディエルの論說は、之と反對に、后期の作中に、崇高な、偉大な、深遠な意義を認めてる。

シカゴ、ディエルは次の如く主張する、

「In God's Way は實に崇高な意義に富んた作品で、其價値は到底批判を許さない。性格の根本描寫や、無限な同情や、深い、トラジカルな哀傷や乃至は、嚴肅な人生に對する哀求、屢々生を傷ふ宗教的偏見に對する彼の反抗――之等が一團となつて表れる、卽此書は作者の人格を形作くる思想感情の梗概である。他の諸作にも同じく斯る複雜な表現を見るが、わけても此書は、ビヨルンソンが大成時代に於ける天才を代表する。之に比して、早春に咲き亂れた百華は、アルネやジンネエヴェ、ゾルバッケンや乃至は叙情詩である」

一八九四年に出た短編集も、全歐州の喝采を博した。集中殊に、"Absalom's Hair" はフロベルの「ボヴ

ボヴリー夫人」と並稱せらるゝ程である。飽く迄現實的な、飽く迄峻烈な、而して飽く迄深酷な点は、後に出た「Mary」と共に、實に彼が半面の投影である。

彼が今年巴里で發表した劇「わかき葡萄が花咲かば」は今や彼が最後の作となつた。那威の俚諺に、「新しい葡萄に花が咲く頃は、古い葡萄が醱酵する」と云ふのがある。其で劇の内容から思附いて此名を附けた。何でも或老牧師の娘達は何時か男の心を追ふような年頃になつた。其れだのに老牧師は歳にも恥ぢず、他の牧師の娘と驅落ちすると云ふ筋だそうな。

イブセンは最後の作「吾等死より醒めなば」に於ては全生涯の經驗を傾倒してあれ丈の物を作つた。其に比すと「わかき葡萄が花咲かば」は稍々振はないとの話である。

(四)

イブセンとビヨルンソンとの比較。

三十代と四十代の間にビヨルンソンは著しく變化した。一八七三年"The Bridal March"の出版と共に、ハイベルト、クンストの幕を閉ぢた彼は、一八七五年「破産」を出して以來一作一作と其變化が烈しくなつた。無論其間には讀み、眺め、味ひ、而して更に考へもした。

然し彼が斯く經過し來つたムードの變化の裏には、可なりイブスンの影響があるのを、否定する事は出來ぬ。イブセンの陰欝な、否定的な特性が、親友ビヨルンソンの廣い伸びやかな性質を、徐ろに同化した。然し誤解してはならぬ。ビヨルンソンも他の諸天才の如く、無論自己に依つて自己を養ひ、自己を伸ばした。イ

ブセンがイブセン自身の角度で觀たように、彼も彼自身の角度で人生を觀た。彼が時に進んで之に反いたのは、更により強く結び附かんが爲めであつた。其作品の內に、時に國民を悔辱し蹂躙したのは、却て深く之を愛したからである。彼が衷心の願ひは、彼の精神と、國民精神との結合に在つた。此結合が何等かの理由に依つて破れる時、實に鋭い苦痛を感ずる。彼の深酷な悲劇は此處に出發する。此点に於て、イブセンは彼と全々反對の位置に在る。イブセンは性來孤獨的な人であつた。從つて冷靜で、批判的であつた。ビヨルンソンは戲曲の中に於てすら、尙自然の生きた詩の斷片を見せたのに反して、彼は全々之に眼を閉ぢた。彼は人生表面の事相にすら、眼を閉ぢて、ひたすら深い暗い底を探つた。

國民的精神と愛國思慕の情は、ビヨルンソンに取つては、欲く可からざる要素である。彼が時に進んで之に反いたのは、更により強く結び附かんが爲めであつた。其作品の內に、時に國民を悔辱し蹂躙したのは、却て深く之を愛したからである。彼が衷心の願ひは、彼の精神と、國民精神との結合に在つた。此結合が何等かの理由に依つて破れる時、實に鋭い苦痛を感ずる。彼の深酷な悲劇は此處に出發する。此点に於て、イブセンは彼と全々反對の位置に在る。イブセンは性來孤獨的な人であつた。從つて冷靜で、批判的であつた。ビヨルンソンは戲曲の中に於てすら、尙自然の生きた詩の斷片を見せたのに反して、彼は全々之に眼を閉ぢた。彼は人生表面の事相にすら、眼を閉ぢて、ひたすら深い暗い底を探つた。

ブランデスは次の如く云ふ。「兩者の相異は、初期に書いた劇に依つて、殊に好く覗はれる。先天的劇作家たるイブセンは、自然描寫の傾向を少しも持たなかつた。自然は彼に對して何等の吸引力も無かつた。彼は人間社會に對すると同じく、自然界からも眼を背けて淋しい孤獨な精神を守つた。其作中の人物も大抵は、直接實社會からモデルを取つたのでは無く、一の思想の具体化である。彼が自然を描いた場合ですら、例へば、「ブランド」中の「氷の敎會」の如く、最効果を與へた時ですら、實在の自然としてよりも、むしろ、一つの象徵として取扱かつた。もつと心の伸びやかな、もつと心の廣いビヨルンソンは、特色ある諸威の風光に足を止めて、ひたすら之に眺め入つた。斯くて劇の裡にすら、其受けた印象を傳へた。」

同じ場所、同じ時に、同じ境遇の裡に生活する二個の人間の間にすら、尙見逃す可からざる差異は生ずる。此差異が卽、イブセンと、ビヨルンソンとの差別である。

ビヨルンソンの一生は、何處か北歐農夫の守護神、トールに似た面影がある。彼は苦しめる人の子を、惡魔の手から救はんが爲めに、絶ゑず熱心に大鐵槌を振つてヂヤイアントランドの土を打つた。其怖る可き地響きに、惡魔が逃げるのを見ては樂んだ。ビヨルンソンは斯く如くにして、國民が愛慕の中心となつた。

之に對してイブセンは、北歐海賊の守護神オヂンの子孫かと思はれる。イブセンは其掠奪物たる『記憶と思想』を肩に乘せて、高い處から全世界を見降した。其時密かに「理智」が耳へ口を當てゝ――冷かなれ、批判的なれ、尖鋭なれ、離れて斯くて孤獨なれと繰返して囁いた。

斯くてイブセンは一度舊理想とコンヴェンションの虛僞と空虛を知つた以上、全力を擧げて、其を破碎し去らずに居られなかつた。無論先途に新し光明を認めた故ではない。斯く破碎し去つた後に來る可き當然の運命は、黑暗々たる懷疑である。斯くなる事とは明白に知りながら。尙一旦虛僞と空虛を知つた以上、再舊世界に歸つて姑息な妥協に安逸を貪る事は、到底彼の堪へ得る處ではなかつた。怖る可き懷疑の壁へ、ビツタリ壓し附けられた彼の苦悶は、卽現代人の苦悶である。

斯くの如くしにて、「ビヨルンソンが國民を覺醒し叱駄して居る間に、イブセンは歐州近代思潮の代表的作家となつた。

イブセンが故國を捨て、社會を捨てゝ、偉大なる孤獨の底に人生の眞を囚へんとした時に尙ビヨルンソンは「然なり吾等は此國を愛す」と云ふ自作の詩を捨てる事は出來なかつた。ビヨルンソンはミケロアンジエロの偉大、眞摯、悲壯な性格を非常に崇拜して居たが、此フロレンスの巨人の「寂寥孤獨」に似た何物をも彼は持つてなかつた。

然しビヨルンソンが敬まはれ、愛されたのは實に之である。國民の心との暖き共鳴である。國家の惡魔に對する勇敢な奮鬪である。之彼が那威の國旗と言はれる所以である。

(五)

結論

其小傳を叙じ、著明な作の批判をなし、更にイブセンとの比較を論した吾人は、今や其結論に到達した。然し吾人の淺薄な智識を以て語る可き事は大概語りつくした。論ず可き事は殆んど論じ終つた。唯此所には多少の遺補をして、此論を結ぶ。

「人々は塔の先端に座して吹く風に髮を飜しつゝ、竪琴を彈ずる長髮の詩人を記憶す可し。……然り、諸君よ！吾人は詩人なり。然も之單に詞句を綴り得るが故に非ず(斯の如きは之人類の天賦也)唯、人類多數の何人よりも、一層明かに觀、より深く感じ、更に僞らず物語り得るが爲めに然るのみ」

我諸威空前の國民詩人の特筆す可き精神は、斯る見地に立つて、永く其光を放つのである。實に彼は、明かに觀、深く感じ、而し全く僞らずに之を語つた。斯くて彼は其民を救ひ、導き。自覺せしめた。

評家ブランデス氏は言ふ。

「若しビヨルンソンが居なかつたなら、諸威國民の現狀は如何なつたらうか。自分は到底想像する事は出來ぬ。實に彼は其國民を造つた。高遠な書や卑近な文を以て、彼は其國民の間に新しき思想を解し易く注ぎ込んだ。斯くて彼は那威に新しき國民的自覺を創造したのである」

諾威人が、彼の名を耳にする時は、如何なる遠隔の地に居ても、本國々旗の飜るのを眼に見るような心地がすると迄に言はれて居る。

全く彼の作は、小說と言ひ劇と言ひ、第一期第二期と非常な變化があるに係はらず、其兩期を一貫して強く現れてをるのは、諾威特種な色彩である。諾威本來の精神である。勿論第二期の作品を一寸見ると、もはや諾威なる語は何時か忘れて、眼を廣い近代人の上に注いだようにも思はれる、然し實際は、信仰問題、兩性問題、社會組織乃至や國家構成に對する意見にせよ、ビョルンソンの描いたのは、諾威を通して觀たる世界である。若しくは諾威人に縮寫して觀たる「人間」である、之卽彼が飽く迄、諾威の國民詩人と言はれる所以である。

殊にビョルンソンの抒情詩の裡には、血と涙とで書いたような強い愛國思慕の情が現れて居る。飾らざる辭句の底に、深い憧れの念が、如何にも溫く溢れて居る。『若しビョルンソンにして他に何等の作を有せずとも、彼は尙諾威古來第一の詩人である」と言はるゝ迄、強く國民の心を動かした。實際彼の手に依つて、傷く痛める農民の胸にも、祖國古來の英雄の血が、又新らしく湧き返へつたのである。

一体人間は三十歲と四十歲の間に、怖る可き危機が潛んで居る。此危機を如何に經過するかゞ、其人の天分の大小である。牧謠的な物語から、出發して遂には「メリー」や「アブサロムの髮」の如き、烈しい現實的な物を書くようになつた、彼が生涯の變化は實に驚嘆に價値し、研究に値する。

あゝ今や彼は永遠に吾等の世界を去つた。

もう北海を北へ志して行く旅人も松深き「アウレスタッド」の谷に、所謂「希臘藝術的」な壯嚴の風姿に接し

て、親しく強き印象を受ける事は出來なくなつた。然し、霧こむる山の牧場を、靜かに歸る羊の鈴は、尙「ジンヲエヴエ、ゾルバツケン」の清き響きを傳へるだろう。クリスチアニア港頭に飜る國旗は、其樹立者の偉大な歷史を、長く旅人の耳に囁くだらう。（十月二十五日夜半脫稿）

龍南思想史

赤瀨八代喜

緒論

國家の興亡個人の盛衰そが根底をなすものは、常に其國民及各自の思想如何に依るものである、偉大、堅實眞摯なる思想が橫溢してゐる國家は駸々乎として一大進步をなす、近時獨逸が新進國として英國を凌駕し世界の第一位を占めんとしてをるのは、全く獨逸國民の思想が偉大、堅實で學術の應用を盛んにし勤勉であるからである。合衆國の獨立はどうして樹立せられた、自由を憧憬渴仰し平等を熱愛謳歌して十三州の心血が迸り、遂に彼等が劍を取り、戟を携へて戰ひ得た賜であつたではないか。ローマの文化燦然として起つたのは彼ローマの人民が剛健であつたからで、之を亡したのはこの氣風の衰頽にある。儒敎がどうして數千年來東洋思想の有名なる一要素となり、唐宋の文化を齎し、乃至は我國忠君愛國の精神を培養するに力があつたか唯孔子が唱へた仁と云ふ精神に胚胎してゐるではないか、西洋思想の根本をなしてゐるものはギリシア文明と基督敎とである、そして基督敎は其本をクリストの愛の敎に源を發してゐる、ルーズヴエルトは前亞米利加の大統領として其名四海に喧傳せるのみならず、實に彼は世界の偉人である。此高大なる人格を生じたの